

# 名古屋の古道・街道

池田 誠一

## 【4】佐屋路…岩塚から万場へ

### 1 木曾三川の渡り

この地方を通りすぎる街道のルートを左右したのが、揖斐・長良・木曾のいわゆる木曾三川です。古代から近世にかけて、この大河群をどこで渡るかはとくに大きな問題になりました。

江戸時代になって、この三川を渡るために七里の渡しが設けられました。海に出て3つの川を一気に渡るという大変合理的な考え方でした。熱田宿から桑名宿までの七里をわずか4時間程度で結んだのです。

しかし問題も出ました。川ではなく広い海に出るため風や波の影響が大きく、揺れたり、時には欠航になったりすることがありました。このため、船に弱い人や急ぎの時に困ったことになりました。

また所要時間も問題でした。遠浅の海のため潮の影響を受けてルートが大回りになったり、風が逆風だったりと、場合によっては6時間位かかることもあったようです。当時の船は当然今日のようなトイレ付ではありません。簡易な物があったにせよ、とくに女の人には心配事だったでしょう。

1626年三代将軍家光が上洛の帰路、

この船で酔ってしまったようです。そしてここにも美濃路とはちがう東海道バイパス、「佐屋路」が出来ることになりました。

### 2 七里の渡しのバイパス…佐屋路

#### (1)東海道佐屋廻り

佐屋路は、熱田宿を出て美濃路を2<sup>3</sup>ほど北にきた金山駅の南西で左に分かれます。そして岩塚、万場の宿の間で庄内川を渡し、神守宿を経て津島の手前で左に曲り佐屋宿に至ります。そこから木曾三川を三里の川渡して桑名宿まで、陸路6里、水路3里の9里の街道でした。(図1)



図1 佐屋路…熱田から桑名へ

この道は古くから熱田と津島を結ぶ道としてあったようで、日本武尊の伝説もあります。藩主の義直も狩に使っており、それを家光の通過のために街道として整備したのでしょう。

開かれたのは1634年で、始めは万場、佐屋の2宿でした。その後4宿に増え、1666年には東海道の付属街道として幕府の道中奉行の管轄になりました。人馬の継ぎ立ては50人50疋と、美濃路とおなじで五街道並の街道でした。

東海道佐屋廻りと呼ばれ、松並木の続いた道。船に弱い人や、女の人などに多く利用されたからか姫街道とも呼ばれました。

## (2)名古屋の佐屋路

佐屋路が美濃路と分かれるのは金山総合駅の南口を出た右側、高層の金山南ビルの南西の国道交差点になります。始めの頃の道はもう少し南で西に曲がっていたようですが、堀川に尾頭橋(新橋)を架けて現在のルートになりました。

交差点で曲がった道は西北西へ真直ぐ進み、烏森を経て岩塚宿に至ります。すぐ先の庄内川は昔は渡してでしたが、今は万場大橋に迂回して対岸の万場宿へ。そこから街道は少し北西に向きを変えて新川を渡り、曲がりくねりながら神守宿に向かっています。(図2)

# 3 金山、そして岩塚から万場へ

## (1)分岐点の標石

佐屋路を歩くとき見ておきたいのが美濃路と



図2 市内の佐屋路(明治21年)

の分岐点の標石です。先ほど記した金山駅の西南の国道交差点。その西南角、コンビニの前の歩道にあります。

- 南面：左 さや海道／つしま道
- 西面：右 宮海道／左 なこや道
- 東面：右 木曾・なこや海道

とあり、北面に1821年佐屋宿の旅籠の人達が建てたと彫られています。実質的にはここが佐屋路の始まりでした。

標石を見たら、少し西のバス停から戸田行で、岩塚方面へ向かいましょう。

## (2)岩塚宿から万場宿

岩塚本通五丁目でバスを降りると、すぐ後ろの道が庄内用水の支流、稲葉地井筋の流れていた所です。その道に沿って少し南に行った交差点が佐屋路で、昔は水路を渡る石橋があったのでしょう。この辺りが岩塚宿の東の入り口でした。(図3)

\*



金山総合駅南西の佐屋路標石

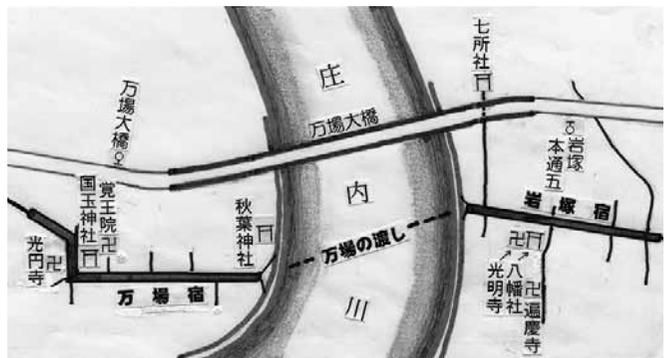


図3 岩塚宿から万場宿



岩塚城のあった遍慶寺の左のイブキが見事

岩塚宿は庄内川の向こうの万場宿と併せて一つの宿の機能を果たしていました。人馬の継立も月の前半と後半に分け、渡し舟の管理は万場宿が行っていました。本陣はありましたが脇本陣はなく、旅籠も数軒という小さな宿場でした。今は当時の宿場の面影は消え、すっかり住宅街に変わっています。

宿場の中ほどの道を南に少し入ると遍慶寺があります。ここは戦国時代の始め岩塚城があったところといわれ、城址の石碑があります。境内のイブキの巨木が見事です。

街道に戻る手前に八幡社があります。1617年の棟札があるという本殿は萱葺きという珍しい建築です。その隣が光明寺で、その門を出た向え通りに本陣があったといえます。

街道を西に進むと庄内川の堤防が近づきます。「小治田之真清水」に画かれた岩塚宿はこの辺りででしょうか。のどかな街道の雰囲気がよく分か



図4 「小治田真清水」に画かれた岩塚宿(右の写真は現状)

ります。(図4)

堤防の手前、右側に奇祭「きねこさ祭」で名高い七所社が見えます。熱田の七社が招請されており、延喜式にも名のある古い社です。この辺りは名古屋の西部では数少ない古墳があります。日本武尊が伊吹山に向かう時に使ったという伝説のある腰掛岩があるなど、岩塚は古くから庄内川の名古屋方の拠点だったようです。

\*

万場大橋に迂回し少し下流に戻ると、土手に秋葉神社が見えます。その横の道を下っていくと右側に万場宿の跡が見下ろせます。両側は住



岩塚の八幡社、カヤぶきの本殿がある

宅街に変わっていますが、真直ぐに続く木造家屋の道が宿場のようにも見えます。

万場宿も本陣だけで脇本陣はなく、旅籠は10軒程度という比較的小規模の宿場でした。宿場の西側、街道が右に曲がる手前に覚王院と国玉神社があります。覚王院はちち観音ともいわれ、境内右奥にある「乳の木」はその果実や葉から出る汁が母乳に似ていることから婦人の信仰を集めているとのこと。国玉神社は、これも延喜式に名のあるという古い社です。



岩塚宿



日本武尊の腰掛岩(七所社内)



ちち観音ともいう覚王院(左奥に国玉神社がみえる)

曲がり角には昔は高札があり、その西側には名古屋の聖徳寺から山門を移した円光寺もあります。宿場は北に曲がってまたすぐに西に曲がり、静かな住宅地が西の出口になります。

<参考文献>

- ①日下英之「佐屋路…歴史散歩」(七賢出版1994)
- ②今井金吾「今昔東海道独案内(新)」(JTB1994)
- ③名古屋市教育委員会「なごやの街道(二)」(1994)

## 4 佐屋路のその後

佐屋路はもともと津島への道であり、渡りも津島湊が利用される予定ではなかったのでしょうか。それが御田堤の工事の影響で津島川の水量が減り、佐屋に変更になったように思えます。

ところが幕末になって、佐屋路にも大きな転機が訪れました。佐屋川の水量が減ってきたのです。明治初年、明治天皇の東幸の時は佐屋まで遡行できず手前の焼田まで。翌2年の時はさらに手前の前ヶ須までしか入れず、陸路佐屋に向かうことになりました。

そしてその同じ年、藩が地元の人からの提案を受け、明治5年、政府は東海道佐屋路を道替し海岸沿いに移すとともに、前ヶ須と西福田に駅(宿が駅に変わりました)を置くことを決めました。(図5) この時をもって、佐屋路は200余年の街道としての役目を終えることになったのです。

にぎやかだった街道に、突然人がいなくなるさびしさ。交通路の持つはかない宿命を、佐屋路の静けさの中に感じます。

行く春や 青葉さがしつ 古街道



庄内川の土手からみた万場宿跡



図5 佐屋路と明治5年の新道